

あそ



2014



カフェ傳

遠きミャンマー



力出し牛のたのしげ夏の雲

佐藤喜孝

あを

五月

老の歩

佐藤喜孝

東京

老の歩に冬草いく本追ひこされ

鴨よりは白鳥所望添寝には

てのひらのひらひらとあり貝櫓

春うごく水のたまりし膝小僧

戦果とは蝶は低きをとびつづけ

戦争に手を出し口出し顔出さず

おにぎりのまんまんなかに母の日は



わたしのデータベースには俳句と短歌で約70万(首・句)を超えた。といってもただ放り込んだといふだけなので重複してゐるものもある。漢字には新字と本字がある。新旧で区別することもある。現今の俳句表現では新字体が多く使はれてゐる。恋100に対し戀は6、会と會は100対2と不人気。例外もある。鶯と鶯は100、蠅と蠅は100:155と本字が健闘してゐる。似てゐる字だが繩も龜も惨敗である。しかし手書で蠅と書いてゐるのであらうか。さうは思へない。校正の段階で蠅に変化してゐるのが大半ではないか。投句者の使用漢字に対し、俳誌編集者はどう扱つてゐるのだらう。「あを」は原稿尊重といふことで蟬か蟬か目を疑らす。表現の一要素と思ふからである。

春浅し

須賀敏子

埼玉

車座で弁当春の鳶寄り

赤々と薔薇の芽育つ雨上り

夕暮れて白木蓮のやはらかに

ビルになる籠屋立ち退き弥生尽

春休みみんな笑顔の遊園地

芝居跳ねふと見上げれば春満月

土曜日はラヂオの日なりつちぐもり

☆

竹内弘子

埼玉

十二月八日うつすらと覚えてゐる

自転車の荷台に二斤ほどの雪

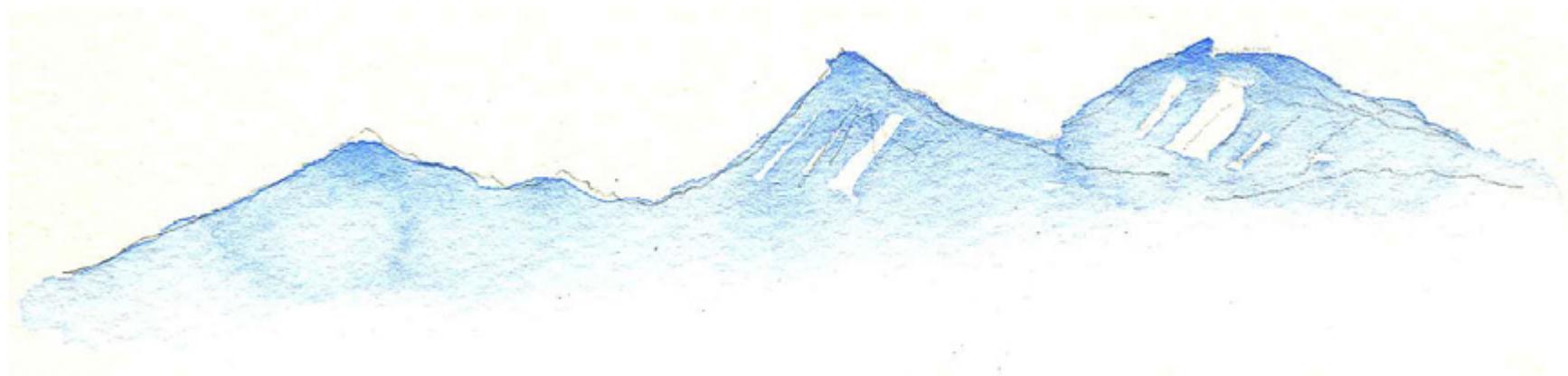
頸すぢに青のさばしる雄の鴨

風邪に伏しサーカスを見たしと思ふ

笠地藏蹤いてくるなり落葉道

蠟梅の枝に恋々たる冬日

電柱の歩み出せり雪もよひ



花粉飛ぶ

田中藤穂

東京

復活祭菜を茹でし湯の金色に

母さんに相談のある春の宵

ヒヤシンス思ひ出の糸もつれをり

遺墨なる「常楽我浄」朧月

春寒し老い勞られをることも

花粉飛ぶを言ひ駅頭に別れけり

齒が痛み杏の花のまつ盛り

芽立ち

長崎桂子

三重

町医者 of 机に壁に雛飾

車絶え足音も絶え春の音

春の風空より青きセーターを

残雪を跳ねて山脈みどりかな

残雪の消え雑草の芽のこぞり

日差あり綻びすがし春あやめ

数増して香り高まる黄水仙

三月二十二日の夕刊にハワイの観測所で測定した大気中の二酸化炭素濃度が五日連続で四百ppmを超えたと発表した。化石燃料の使用が原因らしい。産業革命前は約二百八十ppmと推定とのこと。人間は文明と引換に自分の首を絞めているようだ。うちの塀の蔦も五年前までは今のようにならなかつた。よその蔦も同じである。東京の田端でも大気の汚染は確実にすすんでいる。

上海で春節の花火を禁止したり、石炭や練炭の焔炉を強制没収したりしている。映像を見た。中国の大気汚染はひどいものがある。子供達の健康にもよい筈がない。進歩と退歩、プラスとマイナスを今よく考えて、 unnecessary ことを切り捨ててゆかねばと切に思う。

独居老人の防災診断で、風呂場・お佛壇・台所・寝室を民生委員さんの立会で消防署員の点検がありました。「ご協力をありがとうございました。」と言っていました。

お断りする人もいらつしやること事です。民生委員さんは止めてもよいよとおっしゃいます。でも若しもを考え、私は部屋の総てを見て廻られるので、少々の緊張と覗き見されるような感じもありますが、火災報知器の点検もお願いするので、受ける事にして居ります。

春 雪

早崎 泰江

埼玉

かたくなに溶けぬ一隅春の雪

大櫂雪振り払ひ凜と立つ

白木蓮いつまで続くこの感慨

春風に山羊顎ひげを靡かせる

蓬餅自家製ですといただきぬ

空威張りのごとき春雷通り過ぐ

花吹雪この世で会へぬ人想ふ

花 道

森 理 和

東京

荒事や白塗り溢る春の汗

花道に見栄切る役者白牡丹

背流すやうに墓石を春彼岸

まぎれなき裾野伸びやか春の雲

林立の帆柱ゆらり春の昼

亡き兄の病状用紙竹の秋

虫除けに葡萄の蔓の表皮剥く



☆

吉弘恭子

東京

地の息を吸って山茶花色をます

春空や投網のごとき雲流る

氏素性生地の重し泣くか鯨

春の雷怒るに力貸してくれ

松若葉否と腹には力いれ

風光る身体にたまる葉緑素

猫走る恋のかたちを総身から

☆

赤座典子

東京

白清く一輪残る鉢の菊

艶消しの黒豆のあり雛あられ

足首にもこもこと巻く春の風邪

我走り母は歩くと春の夢

春昼や怖づおづ通る事故現場

二〇二一年三月十一日あと二句

何もかもが当たり前となる石牡丹

被災地に四度目の春ならひ吹く

もう五十年以上になるが選挙権を得て始めて投票をする時の、ワクワクドキは忘れられない。いつの頃は今記憶にないが、父の顔に銃弾をかすめた後がどうも気になって仕方がなかった。なぜ鉄砲のあとが銃を持たない父にあるのか？が。それから成人になつての自分の投票した方が、私が思っているように国を作ってくれる。単純な考えであつたことが今になつて切実に感じる。二十歳の時の新鮮な気持。戦争放棄を明言していた党にソワソワしながら投票した。とても嬉しかった。ところがその党も壊滅（理由は書きたくない）した。それからの私、新鮮な心を持ち続けられるか心細かつた。今日朗報がラヂオから流れてきた。

（続く）

先日、お風呂でラジオを聴いていた時「近頃感じることは何ですか？」との問いに「この頃は何もかもが当り前になつている。自分の家に帰れない。苦労して育てていた畑に帰れない。ペットを飼えない。学校が無くなる……等。震災を何年か過ぎる内に、それらが皆普通になつてしまっている。」云々。

答えた若い女性はナントカ88の一員であつた。

普段彼女達がえー？とかキヤーとかすぐ言うのについていけなかったのだが、この発言は 衝撃であつた。

気持ち慣らされていたのは自分の方であるといたく反省し、名前は聞き損じたが、彼女に大いに感心したことであつた。

☆

井上石動

山梨

春炬燵志貴の歌など眺めゐて

椿寿忌の駄賃の一句らちもなし

篤農の道具選びや諸葛菜

木洩日のうすき影揺る錨草

口中に初夏の息吹ぞ花山葵

桃の花突如の風に舞ひにけり

古幹に生ふる小枝の花ゆたか

かげろへり

大日向幸江

埼玉

一枝に雀の家族四温の日

三陸の果てなき荒地かぎろへり

痛々し目刺の串のささくれて

初蝶の危なつかしくも橋の上

円周率果てなくあるやつくしんば

永き日の終活などと軽々し

郭公の声に目覚めて嬉しかり



02年日韓大会。大分・中津江村「熱烈歓迎」後の第二次キャンプ地（河口湖）でのカメルーン・チームの宿舍内通訳を、一人で買って出た。新潟での初戦を終え、深夜に入村。人気のエムボマ選手にサインねだりが殺到。丁寧に応ずる彼に「迷惑ナラ断ルガ如何？」に「OK」とニコリ。それからは朝から夜中までの、「ユベントスに入れるんだ」と瞳輝かす最年少選手。若きエト選手は宿内エステを気に入る、毎回同道（サロンの側からも「無料、願毎日招来」ノ言有り）。正キーパーは、私の貸し金を翌日律儀に返済。コーチ（後に監督）の怪気妻への夜毎の電話心対、マネージャーの深夜の愚痴の話相手。往年の得点王ミラさんとは、日本強し弱し譚。

最後の夜は宿舍主催の送別会。ドイツ人監督は英語のみ故、山梨弁・標準語⇄英語⇄フランス語の「綱渡りの対応」に冷汗百斗。主将ソングさんのお礼挨拶、その「丈の高さ」に慄然。アフリカチームは、いろいろと評判はあれど、彼らは実に真摯なりき。名をなす一流は、人間的にも一流。業務果てた翌日から、「胃異変？」で二週間入院……が後日談。

6月に14年大会がブラジルで始まる。

三月抄

木村茂登子

神奈川

父母もその父母も雛は識る

家霊そこにおはしますかに雛の間

冴返るこの節々の不満足

来し方も行方も知れぬ春一番

塔右に左に春の隅田川

校門の石のぬくもり卒業す

青テントの主今いずこ花吹雪

☆

齊藤 裕子

東京

子も母も這うやうにして蟻の穴

浜離宮庭師集結松剪定

納まりよく鉢の隅からすみれ草

微風に送り出さるる糸桜

菜の花の香りに咽せる浜離宮

咲き初めの傷みなき白沈丁花

白木蓮花脱ぎ捨てて藁伸ばす

女の子にとって雛祭は最も楽しい行事の一つである。祝の膳を戴き乍らお雛様も皆が寝てしまった後宴会をするのでは、と幼心に思ったことがあった。沢山のお供物があり三人官女の白酒や五人囃子の音楽があるのだからと、お雛様を飾ってある間は一日に何度もその前に坐って十二単を着た気分になったりもした。ある夜こっそり雛を見に行くと、うす暗い灯影に写されたお顔がとても恐ろしく見えてびっくりした。空襲で消失する迄お雛様は私達四人の姉妹の成長を見守ってくれていたとの思いがあつてなつかしく思われる。

旧家のお雛様はその栄枯盛衰をつぶさに見てきたんであろうと思つとそこに家霊というものがひそんでいるように思われてならない。

主人に誘われ、テレビで紹介された浜離宮の菜の花を見に出掛けた。中の御門に入つてすぐの桜が咲き始めていて携帯やカメラを向けている人達が大勢いた。歩いて行くと、お目当ての菜の花畑の明るい黄色が目に入ってきた。これも外国人や親子連れの人達で一杯だった。近づくにつれて香りが漂ってきた。

子供の頃、数枚の田圃に菜の花を植えてあつた。一面黄色の田圃が、花が終わったりやがて莢をいっぱいにつける。莢が弾ける前に収穫して種子を採る。収穫の行程は手伝わされた事がなかつたので、よく覚えていないが、最後の脱穀の時、その中で遊んだ事があった。大きなバスケット地のシートの上に面白い形の木製の脱穀機を据え、菜種を脱穀する。シートの上に広がり溜まっていく。靴で入ると叱られるが裸足だと何も言われなかつた。シートの上に散らばつた菜種は、素足で踏むと、何ともいへぬ感触で足裏に心地よく、いつまでもその中で遊んでいた気分になるのだった。

収穫した種子からどの位の油が採れたのか知らないが、何日か経って一升瓶に入った黄褐色の菜種油が数本、町の精油所の人から届けられたのを覚えてる。

桜

篠田 純子

港区

ぶらんこをこいでる夜のホームレス

御府内の全山吉野桜かな

コンビニで無駄使ひする桜の夜

桜冷秋田屋あべちゃんまるます家

ほーほつきよきん日比谷公園にて初音

余花揺する入相の鐘増上寺

花筵塩に旨味のうで卯

春の寄席（入船亭二門会）

芝宮須磨子

中野区

行きあたりばつたり生きて春卒寿

聞かせ笑はせ見せてそれぞれ春の寄席

喜寿米寿卒寿集ひて春の寄席

お花見や四人連れ立ち絆かな

弁当の先づ食べはじめ木の芽和

摘草や気おくれしつっお懐紙へ

庭静か若葉茂りて透き通る

初孫の入学式に参加した。孫の生まれた時、臍の緒が首に巻き付いていたらしい。初めて抱いた時は嬉しくて泣いた。オムツも替えたしこっそり私の乳にも触れさせた。

名前を呼ばれ手を挙げ「はいっ」と言った。嬉しかった。いたずらで落ち着きの無いところは、私にそっくりな子だ。

入学した小学校は、一年生百五十名。大勢だなと思った。ここでガキ大将になるのは、大変だろう。担任の女性教師が又、私の苦手なタイプ。号令掛けたら走りなさい。号令かけるまでは、走らないっ、という感じがひしひしと伝わる。

私の一年生の時の担任とそっくり。先生の言う事はあんまり聞かなくていいよと、心で呟いた。



須磨子さんの折紙

蜃 気 楼

定 梶 じ よ う

石 川

布団干せば遠山かけて飛行雲

一塊の雲あり風が志す

雪解川貨車さしかかり恐る恐る

栄螺漁解禁日回覧板に載る

教育に關スル勅語春燈下

もの捜せば見つけてたうもろこしの種

欄干にかもめが並び蜃気楼

〈妻の手が蚊をうち損ず愉快なり〉この句、初めは、〈妻が蚊をうち損ずること愉快なり〉として参加句会に投句。会の主宰者（女性だったが）、中七が字余りだから「ここはうち損ずこと愉快なり、としましようね」と優しく言ったことだった。一月号で石動さんも触れていらっしやる。

授業風に説明すれば、文語四段動詞以外の、連体形が接続すべき体言に終止形をくつつける、誤りと思うのだが高名な方まで「俳句として許容できる」と書いていて、驚く他ない。用例をあげることには事欠かないが、不思議に住句が多い。一つには、初心のうち素直に「落つる椿」と遣うが、ある程度経験をつむと定型に急ぐあまり「落つ椿」としてしまふ、ということもあるが。

いのち延ぶることに必死や冬銀河
瀧春一
きちんとした人はきちんと遣つのだ。

あをキーワード俳句辞典(きひーきみ)

気品

笹百合の気品を愛でし笠ヶ岳

須賀 敏子

寄付

昼飯時はづして祭の寄付集め

竹内 弘子

貴腐

貴腐といふ葡萄の力バツカスに

木村茂登子

起伏

地の起伏陽が早春をみだす

渡邊 友七

老いてなほ起伏ありけり花八手

山莊 慶子

レタス畑起伏の蔭にエンジン音

佐藤 喜孝

遙かまで馬柵の起伏の鳥曇

定梶じよう

貴婦人

枯野より貴婦人といふ汽車着きぬ

田中 藤穂

机辺

机辺の塵払ひてみもし文化の日

木村茂登子

気紛れ

初詣気紛れに買ふ達磨かな

早崎 泰江

生真面目

生真面目な人と酒酌む花あかり

後藤 志づ

気まま

吹くも止むも涼風気ままな時すごす

高橋 信佑

気儘なる気温の五月なんのその

芝 尚子

クリスマスケーキにツリー気ままなり

芝宮須磨子

独り身の気儘や布団ぬくめをり

鎌倉喜久恵

古時計気儘に鳴りて春闌ける

赤座 典子

君

青春の君とわれ居し春火鉢

田中 藤穂

岩山に君の好みのひとつばな

須賀 敏子

君が袖春の野原ぞなつかしき

芝 尚子

君が代は呟きてこそ花ひらく

堀内 一郎

母の白玉君の白玉秋ふかむ

佐藤 喜孝

青大将君も一瞬怯んだね

森 理和

梅雨に入るかつてラジオに『君の名は』

定梶じよう

菜の花忌今世に君がをりませば

木村茂登子

君の声すこしあたたかクリスマス

井上 石動

ねえねえと呼ぶ君のこ糸山に雪

井上 石動

杭を出て杭に戻りし冬の影 佐藤喜孝
 しわくたの千円札で春浅き 定梶じょう
 跳ぶ浅田真央金柑の甘く煮え 須賀敏子
 笑ひ合ふ鶯餅の青きなこ 竹内弘子
 木の枝で両手小さな雪だるま 田中藤穂
 熊笹に子豚に似たる残り雪 長崎桂子
 ここですと突如知らせるクロッカス 早崎泰江
 寒紅梅あなたに逢へるけふらら 森 理和
 共に見し菜の花けふも見にきたり 山莊慶子
 探梅に飽きたる頃の試食かな 吉成美代子

只管にアスファルトつつく寒雀 吉弘恭子
 篝火草繕ふものの見つかりぬ 赤座典子
 春宵の片手痛めて知る総身 井上石動
 無人なる家の吐き出す余寒かな 大日向幸江
 何となくココア飲みたし春の雪 木村茂登子
 点滴終へ夫と歩けば春告鳥 斉藤裕子
 いやおひや私の中の縄文人 篠田純子
 老集ひ自立の話ごまめ囁む 長崎桂子
 風避けて立話する野水仙 々

喜孝抄



杭を出て杭に戻りし冬の影

佐藤喜孝

二〇一〇年十一月十三日、
都立清澄庭園内「涼亭」において『あを』十
周年祝賀会が行われた。その折の作者の一句

一本の紅葉を軸に日のまはる

を、八田木枯先生が「天位」に選された。

木枯先生は、「喜孝さんの新しい句作りに対
峙する姿に共鳴し、比類ない発想の楽しさ云々」
と祝された。

四月号の掲句に接した時、この句とこの日の
ことをすぐに思い出しました。作者は「追われ
るような忙しさの十年も振り返ってみれば短く
も感じ、今日また新たな一歩であります。」の言

葉で会を締め括られました。

この二句の持つ意味は同根より発想するもの
と思われず。

この稿書きながら次の句を思い出しました。

冬の水一枝の影も欺かず

中村草田男

(茂登子)

建国日さつかお金がもつないか

定梶じょう

じょうさんは私と殆ど同じ頃「あを」会員と
なられた方と記憶しております。長い俳歴を持
たれている方と推察しております。女性の多い
「あを」の従来にはなかった句柄、掲句のように
お金を詠んだ句が何句かあることにその意図を
はかりかねるところがありました。四月号「三

月作品より」で

寒燈や賽銭箱をのみ照らし

の句を佐藤喜孝氏が『諧謔』を受け止めた」
と評されていたので解釈の方向を得た思いでし
た。そういえば

出稼ぎに行こうと思ふちんちろりん

の様に一見冗談口とも思われる句もある。

休日に競馬・競輪・パチンコなどに出かけた
時、もう一ト勝負と思ったらお金がなくなってい
た。という家計とは別財布の物語りと受けとめ
ました。(茂登子)

しわくたの千円札で春浅き

定梶じょう

わたしは「しわくちゃ」といひ「しわくた」
は使ったことが無いから魅力がある。千円札の

状態がしわくちゃよりわびしさが増す。「春浅き」
の距離感はまだ句を暗くはさせずささかと思ふ。
「しわくちゃ」は広辞苑にはあるが「しわくた」
は……。おととつと、じょうさんに「広辞苑
信者ですか」とわらはれさうだ。(喜孝)

跳ぶ浅田真央金柑の甘く煮え

須賀敏子

特異な題材である。しかし無いわけではない。

羽子板は今年の顔の遼と真央	西垣 順子
銀メダル真央麗しく桃の頃	藤見佳楠子
雪晴れや持てる力の浅田真央	池田 光子

俳句にこう詠まれる人も珍しい。人気者の証
左。今回初めて敏子さんは連句を巻いた。手練の
やうに楽々と付をこなしてゐる。この付句の感覚
がこの句に働いてゐるかと思った。浅田真央の演
技に感動し、金柑煮の出来具合にまた感動。作者

は真央にも金柑煮にも金メダルを差上げた事だらう。エネルギーシユな作者である。(喜孝)

木の枝で両手小さな雪たるま

田中 藤穂

熊笹に子豚に似たる残り雪

長崎 桂子

藤穂さんの句。手足がないのがだるまさん。しかし作者の見た雪だるまは小枝で手が作られてゐた。ふつとほほゑまれたことだらう。

桂子さんの句。熊笹の上に融け残った雪の形が子豚に見えた。かわいらしい句である。ご兩人とも童心豊かに持ち合はせてをられる。読む方も頬がゆるんだ。(喜孝)

対岸にクレーン動きて春浅し

山莊 慶子

春の兆しを求めての散策。

土筆などもう出ているかと思つて来て見たが、あるかなしかの下萌えの中になかなかそれ

らしきものは見当たらない、フト対岸を見ると外に何も無い青空の中、大きなクレーンがゆくりと動き出した。気がつくとも水面もおだやかにゆるやかに風も心地良い。今年は冬が長く、雪も多かつたがやつと春らしさを感じることが出来たという情景でしょうか。大きな風景画を見た思いがいたしました。(茂登子)

ドアひらく梅が香のせる停留所

吉成美代子

バスで郊外の風情ある道を走っていらつしゃつた時なんでしょうか。

窓からも梅の花を楽しんでいたところ、停留所に止まってドアが開いた時、さつとその香りが乗りこんで来た。美代子さんばかりでなく車内の乗客の方々も一様に感激されたことと想像いたします。

予期せぬ幸とはこうしたことでしょうか。小

さな旅の心に残る思い出となることでしょう。

(茂登子)

探梅に飽きたる頃の試食かな

吉成美代子

どんな状況の試食かは分らぬが、さういふこととはどうでもいい。風流な探梅と試食といふ俗語が出会ふ。このはぐらし方がおもしろい。試食に「かな」を付けるなどとは恐れ入った。(喜孝)

口管にアスファルトつつく寒雀

吉弘 恭子

寒雀が道路に下りて何か啄んでゐる。木の実、草の実、虫などの少ない冬は鳥たちにとり厳しい季節なのではなからうか。都会の小鳥にとつてはなおさらである。作者には餌を啄んでゐるようには見えない。ただひたすら道路を啄んでゐるやうに見える。(喜孝)

春宵の片手痛めて知る総身

井上 石動

普段何気なく使つてゐる手。あまり使つてはゐないだらうと思はれる小指の先を少々痛めただけでも使ひにくく、改めて五本あつての手なのだを知る。ましてや痛めたのは片手である。総身に及ぶ影響から、体のことを知つたのである。しかも「春宵」ともなれば、尋常ではない原因で痛めたのではと邪推した。(喜孝)

何食はん夫の口癖花八手

斉藤 裕子

下段の筆記を読み、辛い大変な目にあつたことで、それを前向きに大きな悟りを得られた裕子さんの精神力に、生まれた意義、生きる意義を改めて考えさせられました。

ありがとうございます。

「何食はん」この言葉にご主人の深く広い大

きな愛情が伝わって参ります。

裕子さんの体力の一日も早い回復を願って食べたいものは何？と問うていらっしやるご主人の言葉を感じました。(茂登子)

いやおひや私の中の縄文人

篠田 純子

「いやおひ」は陰暦三月の謂。弥は「いやが上にも」のいや。いやおひで草木が更に茂るさま。転じて「やよひ」となる。と辞書にある。掲句は弥生の頃になるとわたしの中の縄文人が蠢き出すといふ。われわれの遺伝子には多かれ少なかれ縄文人や弥生人の情報が入って居さうだ。感じるか感じないかは人それぞれ。どんな縄文人のイメージなのであらうか。あの縄文土器の力強さから推し量るに「いやよひ」は的確である。もう一句に「いやおふる」として使はれてゐた。動詞にすると季語としての扱ひは難しくなるが、

捨て難い句である。(喜孝)

老集ひ自立の話ごまめ囃む

長崎 桂子

特別作品「寒の入」の一句。桂子さんはわたしより年長者だが、はるかに元氣である。特作は身辺の出来事や感じたことを丁寧に纏められてゐる。老いて自立のはなしを同年配の人達と話し合はれてゐる。素晴らしいこと。ごまめ囃むことで健康に留意されてをられることが分る。若者に「ごまめの歯ぎしり」とはいはせない気概がある。「あを」には指標にすべき人が大勢をられる。ありがたい。(喜孝)

わが敬愛する俳人たち

―百日紅乙女の一身またたく間に 草田男―

阿部寒林



高島 茂

丁度この項に移るときに何十年ぶりの大雪となった。この日私は彼の日の大雪のことを想い出していた。

その日、茂さんが自宅のある中野寄りの高円寺から阿佐ヶ谷のぼくの家へ積雪の中を徒歩で沢山の食糧を持参してくれたことである。このことは『獐』追悼号で書いているのでここでは省く。

茂さんとの初対面は瀧先生の項で書いた通りであるが、その頃の新宿駅西口はいままで言えば暴力団である安田組が牛耳っていたのである。後年西口の業者が丸となっていた西口会館が出現したのである。茂さんの経営する「ボルガ」は小田急ハルク裏へ移ったがいつの間にか文化人の集う酒場として知られるようになったことは多くの人の知るところである。茂さんは出入口近くのレジ管理とカ

ウンターの客相手などをしていた。ぼくが頻繁に通っていたころ（昭和三十年代）必ず顔を合せる俳人がいた。その人は皆川盤水さんであった。後年『春耕』を主宰し、山岳雑誌の俳句欄の選者などをしておられたので久しぶりに会いたいと思った矢先に逝かれてしまわれた。

茂さんの前はレジの関係上必ず一人分の止り木が空けてある。ぼくが一人客と知ると必ず其処へ招いて仕事の合間の談笑となったものである。また常連の多くの文化人を紹介してくれたのもその頃であった。又所属『暖流』での活躍ぶりは群を抜いていた。酒場のオーナーとして、また俳人としての立場は異彩を放っていた。後に現代俳句協会賞を一度は辞退したが二度目の時は受ける気になった。

前述のようにここで多くの俳人を知ることになったが、今思うと瀧先生といちどもあわなかった。毎月の暖流句会も「ボルガ」の二階で催していたがその時は殆んどぼくが欠席

していたので瀧先生とは会えなかったのである。後年茂さんが『暖流』から去っていくわけだがその原因は今では故人となった盤水さんしか知る人はいなくなった。盤水さんは瀧先生と茂さんとの確執を生じた原因をぼくに話したがっていたが、「ボルガ」内ではそれも出来なかった。然し今それを知っても書く必要もないと思っている。

『暖流』と無縁になった茂さんは『獐』を平成二年に創ったが事実上の創刊は四年になつてからだと思う。兎に角『獐』は頁数は少なくとも、装幀といい内容といい俳誌としては垢抜けていたと思う。茂さんが良き編集者佐藤喜孝さんを得たのもこの頃である。

ここで顧みて今更思うことであるが、茂さんと初対面が数十年、一度も私的に外で懇談などしたことがない。店内か、二・三度高円寺の建替前の自宅であった。皮肉というか悲しむべきというか、次は数十年後の慶応病院の個室、そして真夏の北里病院での身罷る二

日前であった。病の前兆は二年程前の平成六〇七年位からあったらしいのだが、仕事が夜遅くまでの性質上休むことなど考えなかったらしい。

ぼくが偶に「躰の調子はどうですか」と訊くといつも「よくないですよ」と苦笑いしながら返事が返ってくる。歳を言えば七十五、六才、深夜までの仕事は激務という他はない。「よくないですよ」とは冗談に言えることではないが、むしろ自虐的な言葉のようにぼくには思えた。忘れ欠けた頃又訊いても同様であった。亭主関白の茂さんであったから家人の言うことなど無視していることは想像出来た。

カウンター内の本人は誰の目にも健康そうに見えたが悪化しつつあることは本人が一番よく知っていたのだ。ぼくが胃潰瘍で慶応病院へ一ヶ月以上も入院したのは未だ新館が完成する以前であった。内視鏡の手術で完治したもののその後今日まで数十回の内視鏡検査

で必ず言われるのが潰瘍の痕のことである。真相は手遅れ一步前だったことは教授回診で言われた。茂さんの良くないですよは深刻に考えるべきだったのだ。

平成九年に入り余程のこととみえて慶応病院へ検査・入院となった。結果は末期の大腸ガンと判明。手術にも成功して秋に退院出来たことは奇跡的であった。

私は平成五年に再入院した。茂さんの入院時には私は通院診察であった。同じ病院なので早速見舞いに伺った。思った通り表面的には元氣な様子で喜んでくれた。短い談笑中の合間にふと机の上に置いてあったクリアファイルを返してみると手術結果が簡単に記入されてあり太字で人工不用と記されていた。これは告知のようなものとはぼくは思い暗い気持を押さえながら退室した。

然し退院した茂さんの句作欲は旺盛で驚くばかりであった。いま手元にある平成十年の『獐』一月号を見ても「佐渡」一五三句を発

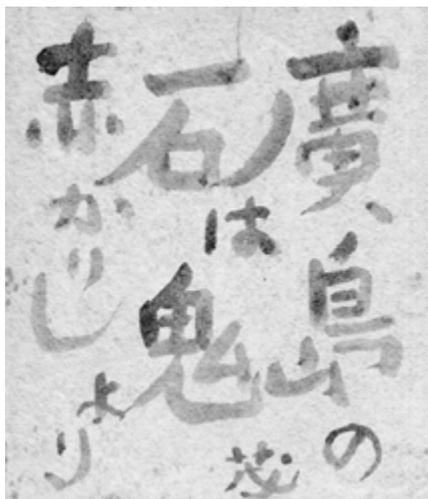
表されているのであるから見事である。終わりの一句（一五三句目）

精霊を海にかへして夏の過ぐ 茂

平成十一年冬、慶応病院へ再々入院するも五月に同系の北里病院へ転院、八月三日午後容態急変、蝉声の中永眠。（享年七十九才）

ぼくは茂さんの死の二日前に見舞うことが出来たが固く握り合った手を暫く離さなかった。

茂さんはよく甲州の武川村へ行き作品も多く発表していたが、若い時に『岳人』編集長であった高須茂氏と上高地へ行ったことを聞いていたの。その頃のぼくは上高地へ数度訪れていたが遂に実現出来なかった。この上高地行は誓子先生が白子の海岸で療養生活しておられた時、持病の病が悪化して暫らく『天狼』の編集を休まれたことがあった。そのような時に訪問したぼくは先生の枕許で今度先



生が元気になられたら一緒に上高地へ行くことを約束したことがあった。然し先生は遠出などとても不可能な病状であった。ぼくもすっかり忘れていたのだが、或年の或日『七曜』主宰の堀内薫氏からの手紙で新聞の随想に先生が貴君との約束で上高地へ行く喜びを書かれている一文が掲載されている、と切抜きが同封してあった。然しこれは実現せず後年すっかり元気になった先生は橋本多佳子さん等一行と乗鞍岳へ行き折からの台風に遭い大変な目に遭った事など新聞でも報じられていた。先生との約束も反故又茂さんとの約束も反故となり結果的にはその後単独での登山は何回も実行しているわけである。

茂さんの出棺の時ぼくは「上高地」のガイドブックを胸に組んだ両手の下に置いた。

自詠自読

オルガンは風の音せり鯉のぼり 幸江

私の小学生の頃の音楽伴奏はオルガン。音楽室から聞えるオルガンの音は私の空想癖にスイッチを入れる。私は大抵青空から空想世界に入る。雀になったり空を行く雲とあそんだりだ。子供の日が近くなると男の子の居る家では鯉のぼりが空を舞う。自由に空を舞う吹流し。真鯉や緋鯉に子供心にも惚れ惚れしていた。元気に遊ぶ鯉のぼり。空想を誘い出すオルガンの音色。

昔翼のあった人類の生き残りの私、今でもこの大空を自由に羽搏く。

春月の今出でくるぞ見るがよし 桂子

平成十七年三月の作で何処から見た月の出だったのかなかない思い出せなかった。記憶力が確かに衰えているのを実感した次第でした。それでこの句の下書ノートを取り出してそれを頼りに、あつそうだったと頷き頷き少し高台にある其の場所へ出掛けた。

ところが此の場所だったと立って見たが、あれから九年を経ていて田畑の埋立ては進み、二階家と三階建てのアパート等の住宅が多く建ち並び、東の空の低い位置は全く隙間もない程建て込んでいます。

あの時、水平線にまだ近い大きくて煌々と輝く黄金色の美しい月が今昇って来るのに出会い、皆さん此の素晴らしい光景を見ましよう。と感動した心で叫んだあの日の夕暮時は、もう此処にはありませんでした。

嗽して鴨居の古ぶ夏の朝 須磨子

この句を詠んだ頃の家は壊されて今は鴨居のない鉄骨の家に住んでおります。そこで

身ほとりに何でも置いて余寒かな

独り居に若松活けて良しとする

胡瓜揉み箸一ぜんの厨ごと

冬の夜ユニットバスに窓はなく

などと独り居の句を詠んでおります。

折紙教室・歌謡教室と私なりに楽しんではおりますが、足許不如意の為句会に出席出来ないことを残念に思っております。出席して勉強させて頂きたいと思っております。

つながれし山羊と目が合ふ梅の花 泰江

久しぶり山羊に合うことを思い立つ。私の住んでいる住宅団地には隣接して立派な農家が点在する。その一軒に山羊小屋があり、カップルらしき山羊が飼われていた。やがて仔山羊が生まれたらしくいつも親子三匹で行動を共にしている様子であった。私が句を作ったのもその頃のことである。そのうち山羊農家の周りが駐車場になったりして山羊を見に行くことから遠退いてしまっていた。

山羊小屋はそのままであった。しかし、山羊は一匹しかない。鬚の長い雄らしき二匹が菜の花をもじやもじやと食べている。母山羊、仔山羊はどこに居るのだろう、見当たらない。丁度その時、飼い主さんらしき人が帰って来られた。思い切って伺ってみる。

母山羊は病死、仔山羊は老人ホームへ養子に行ったとのこと、詳しくは聞かなかったけれど老人ホームで

ペットとして飼われているらしい。心暖まる話ではな
いかと思いつながら山羊小屋を後にした。

温もりに魅せられて踏む落葉かな 秦江
と、全く同じ心境である。

枯葉踏む枯葉が放つ陽の匂ひ

茂登子

初夢に父母も居り嬉しげに

裕子

川崎市幸区の大摩川大橋の土手下の鉤の手のところに「御幸公園」がある。明治大帝の行幸地、昔の梅の名所である。

梅林の手前に市民球場があり、この三方を見事な大
いてふが囲んでいる。

秋 いてふの枯葉がフカフカの絨毯のように散り積
もっている。足首までやわらかく包みこんで崩れると
きかすかな音と共に陽の匂ひが癒しの香りとなって身
ほとりに漂う。

枯れるものやすらかさがお陽様の温もりを抱いて
不躰な侵入者をしばしなぐさめてくれるのである。二
月作品より鑑賞させていただいた

と言いつ出す事もできなかった。それは暗黙の了解のよ
うに恒例になり、歳月が流れた。

義父に介護が始まり、数年の後に亡くなった。その
二年後には私の父も亡くなり、結局私の夢は叶わず仕
舞になってしまった。

父が亡くなって初めての正月、母の寂しい正月が気
掛りで、私は東京の三箇日を済ませ、結婚後初めて正
月に一人で里帰りした。長い年月を経て実家の正月も
様変わりし、昔のような正月を味わう事はできなかった
が、母の喜ぶ顔を見て私は満足だった。

義父亡き後、義母は元気に十年を過ごし、晩年介護
も必要となったが自宅で私達に看とられ九十三歳の生
涯を閉じた。

義母が亡くなって二年目の正月、私は楽しい初夢を
見た。賑やかな正月を迎えている夢だった。そこには
私達家族と主人の両親、そして一度も孫達と一緒に正
月を過ごす事なかった私の父や母も一緒にいるのだっ
た。嬉しそうな父の顔、賑やかな笑い声。楽しい楽し

主人は末子だったが、私達は結婚当初から親を見る
という事で主人の両親と同居した。所謂本家の嫁となっ
た私は、お正月はいつも主人の兄姉家族や親戚を迎え
る立場だったので、一度も正月に鹿児島島の私の実家に
帰ったことがなかった。

毎年夏には家族で里帰りしたが、いつか主人や子供
達に鹿児島のお雑煮や御節を食べさせ、田舎の正月を
経験させてやりたいと密かに願っていた。また一度で
いいから、自分の両親にも孫と一緒に賑やかな正月を
過させてやりたいものだと思っていた。

しかし、主人の両親も高齢だったこともあり、客の
多い正月の接待を義母一人に任ずることもできず、ずーっ

い正月。私の長年の夢は、その初夢の中でやっと叶っ
たのだった。

搔卷の別珍やさし生家かな

石動

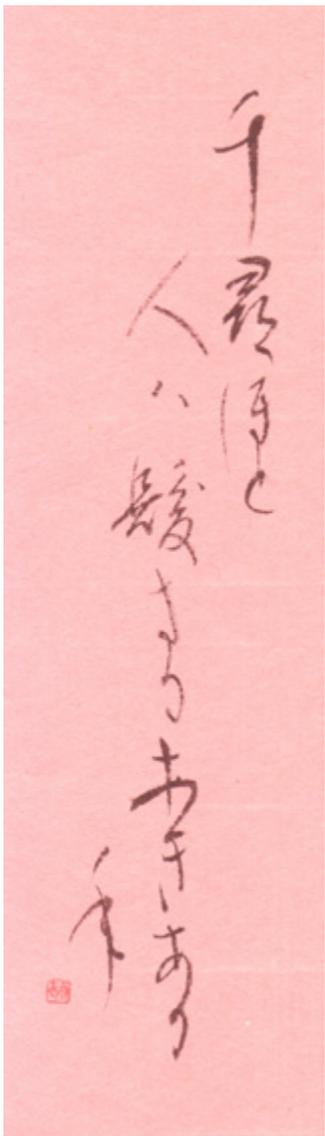
学校をヒヤヒヤで卒業した年の九月、フランスへ渡っ
た。中学高校時代で見たフランス映画の、一方で都会的
一方で純農村の国に興味が続いていた。さらに、シャ
ンソンを原語で理解したいと。北の北欧や蘭・独では、
あまりにも重い。南の伊では陽気すぎる。スペインか
フランスと。

約五年をフランスで過ごし、帰国した一月十五日の
東京の夜空には、白い浮雲が。ああ、日本に帰って来
たんだ。甲府の実家へ帰ると、炬燵に蜜柑。姪っ子た
ちがピンクレディーのテレビに夢中。『じゃあゆっくり
休んでね』と義姉が用意してくれた床に入ると、搔卷
の別珍が私を包んでくれた。

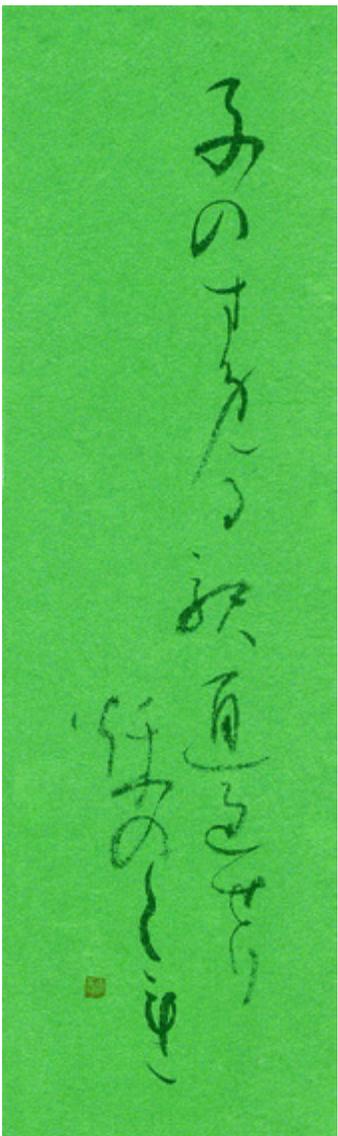
ああ、日本だ、日本に戻ったんだ……と。

天野玉萌先生 誌上展

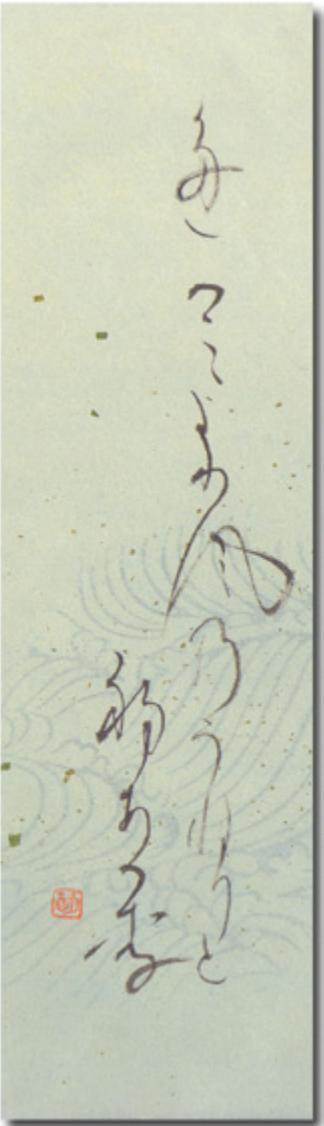
二〇〇二年一年間『あを』に会員作品をご揮毫頂きました天野玉萌先生が今春第68回日書展において「日本書道美術院大賞」を受賞なされました。慶祝!!。ささやかですが誌上回顧展にて改めて鑑賞したいと思ひます。



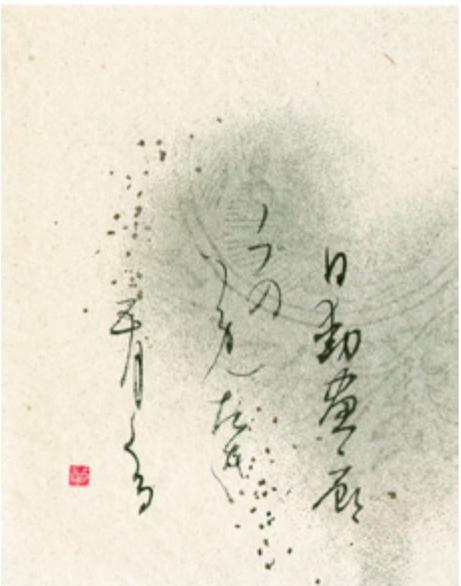
千尋はぐひとは髪切るあきあかね 篠田純子



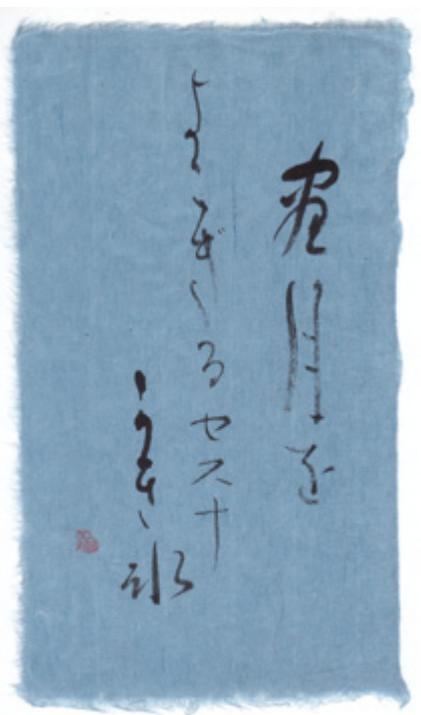
子の住める駅通過せり秋の暮 山莊慶子



高みより風のうねりと初明り 芝宮須磨子



日動画廊ノブのつめたき五月くる 竹内弘子



昼月を横切るセスナかき氷 森理和

あとがき

「あを」はよんどころない事情で製本まで自家製。最初は平綴じにしてゐた。平綴じ製本は確実でよいのだが、A4一枚に4ページ割付けてプリントする為作ったデータを切り貼りする。このときミスが発生する。気がつかない事たびたび。最後はPDFファイルにしてネットに載せるので、また手間掛る。そこで一念発起無線綴じに挑戦してみた。これが素人の情けなさ、失敗の繰返しで皆様にご迷惑をおかけしてゐる。

①まづA5用紙の両面にプリントする。②これを一冊に丁合したものを10冊に束ね固定する。③綴じる側を裁断する。④ホットスティックといふ棒状のものを熱で溶かして塗布。アイロンで平滑にする。⑤その上に和紙を貼りその上からホットスティックをまた塗布。

この④⑤をいろいろ試みた。のこぎりで目を入れた、そこに糸を埋めたりもした。ボンドで固めてもみた。その上で今の方法がベストのやうだ。

⑥冷えて固定したら10冊を一冊つつに分ける。⑦表紙を糊付⑧三方を裁断して仕上ります。(喜孝)

正誤

阿部寒林先生の「吾が敬愛する俳人たち」に
百日草乙女の一身またたく間に を
百日紅乙女の一身またたく間に に訂正いたします。

二〇一四年五月号

発行日 五月十日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090 9828 4244
ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130・6・55526(あを発行所)
乱丁・落丁お取替えます。